

教員養成課程における水彩画の指導法に関する一考察

桶田 洋明*・松下 茉莉香**

(2016年10月25日 受理)

A Method of Instruction for Watercolor Painting in Teacher Training Programs

OKEDA Hiroaki , MATSUSHITA Marika

要約

扱いが容易な水彩絵具は学校教育において積極的に使用されているが、教員養成課程に所属する学生のそのスキルは高くはない。そこでその学生が教職に就いた際に、小・中学校の授業において水彩絵具を導入する時に必要な基礎的技能や効果的な指導法について、特に描画技法を中心として検証し、それらの習得をはかるための効果的な実技による実践例を挙げて考察した。小学校では不透明・半透明水彩絵具による描画で、混色を中心とした比較的高彩度な色彩でのびのびと描き、中学校以上では透明水彩絵具による透明感のある表現の導入が適していることが、文献や教科書等の検証から確認できた。小学校の授業では必要な指導スキル習得のため、構図・色彩理論を含めた基礎的要素やモダンテクニック等の練習を作品制作前に実施することの有効性が、中学校ではウェット・イン・ウェットの技法習得によって、透明水彩絵具による表現力向上が見られることが明確になった。

キーワード：教員養成、水彩画、美術教育、絵画

* 鹿児島大学教育学系 教授

** 鹿児島女子短期大学児童教育学科 講師

1. はじめに

水彩絵具は扱いが容易であるため、現在も学校教育において積極的に取り扱われている。特に小学校においては全学年にわたって用いられており、例えば図画工作の教科書を散見しても、各学年に応じた水彩画による参考作品の掲載が確認できる。中学校美術の教科書でも、小学校のそれよりは少なくなるが、水彩画による作品は一定数掲載されている。つまり小・中学校を通して水彩画に触れているため、中学校終了時はある程度の水彩による表現力は習得しているはずである。しかしながら、教員養成課程に所属する学生の水彩表現に関するスキルをみると、決して満足のいくレベルに達しているとは言えない。中・高等学校美術教員をめざす学生はもとより、小学校教員をめざす学生にとっても、指導者としての水彩画の基礎的知識、表現技法や鑑賞方法等の習得は必要不可欠なものであろう。

そこで本研究では教員養成課程の学生が、将来教職に就いた際、特に小・中学校の授業において水彩画を扱うために必要な基礎的技能・指導法について、それらの指導スキル習得をはかるための実践例を挙げて、効果的な実技実践の内容について明確化していくことにする。なお、本研究では水彩表現の描画技法を中心に検証・考察をおこなう。

2. 水彩画の種類と特徴

本章では水彩絵具の種類やその特徴・表現技法について検証する。

水で溶くだけで描くことができ、絵具の乾燥後も再溶解することから後片づけも容易な水彩絵具の主成分は、顔料とアラビアゴム、グリセリンである。アラビアゴムは水彩絵具の展色材・接着剤であり、固化しても再溶解する性質を持つ。グリセリンは保湿剤であり、固形化することなく絵具のチューブに保存する役割を果たしている。水彩絵具に該当するものは、現在では複数の名称で存在している。大別すると透明水彩絵具と不透明水彩絵具の2種になり、グアッシュ (Gouache) やポスターカラーは不透明水彩絵具に属する。透明・不透明水彩絵具の両者に基本的な差はない。透明水彩絵具は用紙の白色を生かした描画を、すなわち水の加減で透明度を調節して描くよう作られている。また多めの水を加えることを前提にしているため、アラビアゴム成分が多い。さらに顔料自体も透明感を出すために細かい粒子のものを採用している。一方、不透明水彩絵具はあまり水を加えずとも発色が落ちず、さらに適度なコクがでるようにセルロース等の増粘剤を加えているものが多い⁽¹⁾。

小学校を中心とした学校教育で扱われている水彩絵具は、不透明水彩絵具の性質を持ちあわせたものが主流であるが、透明水彩と不透明水彩の中間的な性質を持つ絵具もあり、それを扱うこともある。いずれも学童用の絵具であるため、通常のものより安価である故に耐光性・耐久性には欠け、長期保存には適さないものである。

次に透明・不透明水彩絵具の代表的な表現技法について検証していく。

透明水彩絵具は前述の通り、用紙の白色を生かした描画技法が一般的である。それゆえ、通常は白色絵具を使用せず、用紙の白色を利用して白を表現する。つまり、完全な白色の箇所は絵具を塗らずに用紙の白色地を露出させておく。白色に近い淡色、例えばほのかなピンク色を表現する場合は、少量の赤色と多量の水を混ぜて作成する。すなわち各色相の明度差・彩度差の表現を水の多少によって作成することが、美しい透明感を持つ透明水彩絵具の特徴を最大限に生かすために最適な技法のひとつであるといえる。ちなみに白色絵具の混色でも淡色は作成できるが、不透明な色相となり、透明色は失われる。

また透明水彩絵具は、乾燥した下層の色の上に透明色を重ねて描く、いわゆる「重色（ウェット・オン・ドライ）」を使うと効果的である。2層の透明色が重なることで、別の美しい透明色を作り出すことができるからである。さらに乾燥していない下層の上に別の色を置くことで、偶然のグラデーションを表現することができる。「ウェット・イン・ウェット」も有効である。この技法は不透明水彩絵具でも用いられるが、水を多量に使う透明水彩のほうが絵具同士の流動性が高く、効果的なグラデーションを生み出すことができる。なおウェット・イン・ウェットは2つの技法に大別できる。一つは用紙を水で濡らした上に絵具を置く方法、もう一つは下層の色が濡れているうちに別の色を重ねる方法である。前者は用紙と絵具との間のエッジがなく、緩やかなグラデーションで淡い色調を表現することができる。後者は複数色による偶然の混色が行われ、透明感のある色を表出するとともに、水の表面張力から生まれるエッジの強調によるシャープな色面の表現も可能となる。

一方、不透明水彩絵具は、透明水彩絵具よりもアラビアゴムの比率は少なく増粘剤を加えているため、発色の高い不透明色を表現することができる。不透明色であるゆえ、下層の色を完全に隠ぺいすることができることから、油彩画のような重厚感のある画面を生み出すことも可能である。また、水の多少による色ムラも出にくいことから、単色による均一な色面の表出にも向いている。ただし透明度は透明水彩絵具ほどではないため、半透明・半不透明色による重色が適している。代表的な技法としては、不透明な色面を生み出すためのパレット上での「混色」による表現が挙げられるが、不透明水彩絵具に水の追加によって、透明水彩絵具の代表的な技法である重色も可能である。他に、用紙に塗布した乾燥前の絵具を鋭利な道具でひっかいて表現する「スク

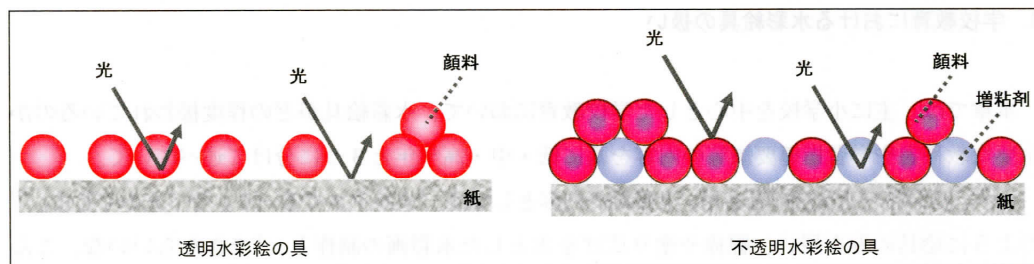


図1. 透明・不透明水彩絵具による着色、乾燥後の断面⁽²⁾

タッチ」も有効である。小学校低・中学年で扱われるクレヨン+水彩の表現でみられる、油と水の反発作用を利用した「パチック」も、透明度が低い色面のほうがクレヨンとの対比が鮮明になるため、効果的である(図1)。

以上、透明・不透明水彩絵具それぞれの特色と、ごく一部ではあるが有効な技法について述べてきた。最後に、これらの技法を学校教育で扱う表現等と関連づけて検証してみる。小学校においては、殊に低・中学年でクレヨン・パスによる線描に水彩表現といった絵画表現が主流であるため、前述の通り「パチック」による技法が見られる。ただし、とりわけ低学年においてはクレヨン等の線描が主流であり、水彩による着色は補助的な役割となっているため、意図的にパチックを利用するというものではないし、その必要もない。また、小学校の水彩表現では、水彩による技法や微妙な水加減等にとらわれず、感じた色や塗りたい色を簡易に素早く作ることができることが第一の条件である。その条件に適している絵具は不透明(半透明)水彩絵具であり、さらに成分を調節し若干の透明度を持たせ、安価な顔料・増粘剤で作ったものが、現在の小学生用の絵具であろう。これらを指導する教員に必要な指導スキルとしては、パチック等のモダンテクニック全般の効果的な表現方法が不可欠である。一方、中学校の水彩表現では透明・不透明水彩絵具の別については明確ではないが、小学校の表現とは違い、透明度の高い、透明水彩絵具による表現が見受けられる。しかし現状としては、入学後に透明水彩絵具を購入させる中学校は少なく、近年多くの学校が購入しているアクリルガッシュ等による水彩表現、または小学校時代の不透明(半透明)水彩絵具を用いての表現が多数を占めている。したがって、透明水彩の特徴である重色・ウェット・イン・ウェットによる透明感の表出のための技法等については、ほとんど取り扱われていない。様々な環境的要因があるのは想像できるが、指導者である教員が透明水彩の魅力を認識していれば、もう少し中学校美術において扱う頻度も高くなるのではと思われる。

そこで次章からはまず、小・中学校で使用する教科書を閲覧し水彩表現の内容や頻度について検証したうえで、小・中学校の授業で水彩画を指導する際に必要な、技法を中心とした指導スキル習得のための効果的な授業実践についてとり上げていく。なお、水彩表現に必要な要素である色彩・構図等や、用紙の種類等については関連事項のみの検証とし、描画技法を中心に考察していく。

3. 学校教育における水彩絵具の扱い

本章では、主に小学校を中心とした学校教育において、水彩絵具がどの程度扱われているのか主要な教科書や学習指導要領等の内容を基に低・中・高学年と3つに分けて述べていく。

まず、低学年の水彩絵の具を用いた絵画の内容としては、「クルクルぐるーり」や「えのぐじま」⁽³⁾のように絵具のみを用い、線描や塗り広げを主とした水彩画の制作と、「できたらいいな、こんなこと」や「どうぶつさんといっしょに」⁽³⁾「せんせいあのね」「のってみたいないきたいな」⁽⁴⁾等、

クレヨンと併用しながら色を着彩して、思いついたものや伝えたいことを描く活動がある。低学年で絵具を用いた活動は、絵画分野だとパスを主にして描く題材とほぼ同数あり、全題材数と比較すると全体の1/4程となっている。

また、絵画の中でも遊びの要素を含んだ題材として、「てでさわってかくのきもちいい！」⁽³⁾や「とろとろえのぐでかく」⁽⁴⁾という絵具に直接触れる感触遊びがあり、他にも「キラキラシャボンで」⁽³⁾という色水シャボン玉や「うつしてあそぼう」⁽³⁾「コロコロぺったんシャカシャカ」「たのしくうつして」⁽⁴⁾等のスタンプやローラー遊びからできた色形を基に、発想を広げて絵を描き加えていく活動がある。これらは、身近な器や廃材を筆代わりに様々な材料も加えて、自由に色形を表現できるような題材で、技法数は限られているが色々な表し方にふれる内容が見られた。更に、絵画以外の立体表現を見てみると、「くつつきマスコット」や「のぼしてぺったん」⁽³⁾など、立体に色付けする材料として、クレヨンやマーカーなどの絵具以外の材料が多く使われており、クレヨンやパスについては、持ち方などの基本的な扱い方から、筆圧による濃さの変化や色の重ね、ぼかし、ひっかき、はじき絵など、様々な表現について触れられていることが確認できた。これは、小学校学習指導要領図画工作内の、内容の取扱いに関する事項に、低学年は「身近な材料や扱いやすい用具」を使い、これらの材料に十分慣れるようにするという点に配慮した題材と考えられる⁽⁵⁾。これらから、低学年においては絵画や立体など様々な領域の素材を見ると、水彩絵具よりパスが主要な画材と位置づけられていることが改めて確認できた。

ここまでの低学年の内容を見ていくと、材料としてクレヨンが多用されている一方でこれとほぼ同じ頻度で水彩絵具を用いた内容が扱われていることが明らかとなった。小学校低学年は幼児期の表現との繋がりからもクレヨンが用いられるが、その理由として、もともとクレヨンやパスは、握力が弱く手の動きを細かくコントロールできなくても、紙に擦るだけで色や線が現れるため、幼児期から小学校低学年など低年齢の子どもでも容易に使えることから頻繁に用いられていることなどが挙げられる。それに対して、水彩絵具は様々な道具が必要で、その使い方や水の含ませ方、混色など、自由に扱えるようになるまでに経験が必要であるため、低年齢の子どもには扱いの難しい画材として位置づけられている。

しかし一方で、クレヨンやパスよりも絵具には次のような長所もある。それは、色を塗り広げる活動がスムーズで、混色もできたり、水の量で絵具の状態が変化する特性があるため、明るさや濃さといった色の変化だけでなく、固い状態から水っぽい状態まで固さを自由に変えることもできるため、水分を少なくすると、しっかりと形や線を求めるための描画材として活かせたり、水を増やすことで垂らしたり、にじませたり、感触遊びができたりと、絵の具一つで色々な表し方や造形に気付ける良さがある。つまり、絵具は自由度があるため、材料にかかわって遊ぶ素材としても、また色々な表し方を学ぶ素材としても、低学年の児童にとって適した素材と言える。そのため、絵画の素材として扱うことは勿論のこと、それだけにこだわらず自由に関われるような機会を作っていくことが必要であると考えられる。

次に、中学年について見ていくと、学習指導要領の配慮事項の中に「水彩絵の具」が明示され、中学年以降も取り挙げるよう示されている⁽⁵⁾。この内容について、教科書の「パレットコーナー 絵の具と筆の使い方」⁽³⁾「つかってみようざいりょうと用ぐ」⁽⁴⁾でも、個人持ちの絵具を扱えるよう、パレットや筆、筆洗の使い方や、絵具に混ぜる水加減と、それによってできる線の太さの変化について示した内容が加えられている。また、これら水彩絵具の基本的な表現に関連して、「絵の具と水のハーモニー」⁽³⁾「まぼろしの花」⁽⁴⁾のような、水彩絵具だけで色々な線や形を描く活動や、にじみや点描などの、基本的な表し方を用いて表す「色・形いいかんじ!」⁽⁴⁾「にじんで広がる色の世界」⁽³⁾等の題材も含まれていた。

更に、「絵の具で遊んで「自分いろいろがみ」」⁽³⁾や「絵の具でゆめもよう」⁽⁴⁾、「使ってみようざいりょうと用具絵の具を使った表し方」⁽⁴⁾では、マーブリング、デカルコマニー、ドリッピングなどの絵具を使った様々な技法や、ストローやぼかし網などの絵筆以外の道具を用いた吹き流し、スタンプング、スパッタリング、ビー玉転がしなどの表現方法が挙げられており、一口で絵具を使った表現といっても幅があることが分かる。また、これらの様々な技法は、その方法を試すだけでなく、技法によって出来た造形から描きたいイメージを発想して作品にまとめたり、「大すきなものがたり」⁽⁴⁾のように、描きたい場面に合うよう技法を選んで表す活動もある。このように中学年では、基本的な道具の扱いについて触れるだけでなく、絵具の基本的な技法である線描や塗り広げ、にじみなどを用いた絵画や、モダンテクニックをはじめとした様々な表現技法が扱われていることが確認できた。

最後に、高学年では「感じたままに花」や「かくれんぼさん」をさがせ⁽³⁾のように、水彩絵具で好みの色になるよう混色し、色で表現する題材や、簡単な色相環や2色を組み合わせる混色した時の色見本など、色作りに関する内容が加わっている。更に画材については、身近な生活の中で心に残る景色や場面を描く「見つけた! わたしのお気に入りの場所」⁽³⁾、「じっと見つめてみると」⁽⁴⁾のように、クレヨンだけでなく鉛筆やカラーペン、箸ペンなどの画材とも併用されたものも多い。これは、高学年になると手の巧緻性も高まることで、道具も十分駆使して表現出来るようになる為、細かな描写に適した材料が加わっていることが分かる。その他、中学年で特に多く取り挙げられていたモダンテクニックを用いた題材は、高学年でも繰り返し扱われ、「想像のつばさをひろげて」「物語から広がる世界」⁽⁴⁾のように、物語やイメージしたことを様々な技法で表したのものや、自分の気持ちに適した表し方で描く「心のもよう」⁽⁴⁾、コラージュなどを取り入れた「まだ見ぬ世界」⁽⁴⁾などがある。絵具を使った表し方の題材という点では、新たに様々なタッチを描く「筆あとと研究所」⁽⁴⁾といったものも見られた。

以上、小学校で扱う教科書を中心に検証したが、中学校美術の教科書についても簡潔に触れておきたい。中学校美術の教科書を分析すると、水彩表現による参考作品の割合は、小学校図画工作の教科書のそれよりもはるかに少なくなる。その要因は、絵画表現における色材の多様化や絵画以外の表現の多様化が挙げられる。色材については、一般的な水彩絵具のほかにポスターカ

ラー、アクリルガッシュ等による作品が登場し、それに伴って水彩絵具の扱いの比率が低くなっている。(なお絵画以外の表現としては、映像表現、インスタレーションを含む空間作品、冊子等、多岐にわたっている。)そこで中学校美術の教科書を検証し、平面・立体を問わず絵具を使用した生徒参考作品の数と、そのうち水彩絵具を利用した作品の数を集計してみた⁽⁶⁾。その結果、水彩絵具による作品の割合は「美術1」で21%、「美術2.3上」で10%、「美術2.3下」で17%であった。しかしながら割合は低いが、絵画の水彩画作品を見ると、透明水彩絵具特有の透明感のある描画が散見された。絵画全体からみると少数であるが、やはり中学校でも水彩画そのものは小学校に引き続き扱われていることが読み取れる。

4. 水彩画指導のための実践例（小学生向け）

(1) 実践1の内容と目的

前章で、小学校では水彩絵具を用いて濃淡表現やにじみ、線描などの基本的な技法で絵を描く活動や、モダンテクニックなどで表現する内容が含まれていることが分かった。それを踏まえると、現場で子どもたちに水彩画指導を行うには、水彩絵具の基本的な技術と、パチックを初めとした様々な表現技法について学ぶことは必要であると考え。そこで、本章では小学校教員免許取得を目指す、美術を専門としていない短期大学2年生を対象にこれらの表現技術が身に付けられるよう2つの実践を行った。実践1は、水彩画を描く際に必要な基本的な技術を、実践2は、他画材や道具と併用した様々な表現技術を抑えることを目的とし、その成果をまとめていく。

(2) 実際

はじめに、実践の具体的内容について触れていきたい。

1 コマ目は、今回の課題でもあるスケッチの意味とねらい、描き初めに必要な構図や空間を表現する方法などを説明した。それらを踏まえ、学外に出て描きたい対象を見つけてもらい、絵の主題が伝わるような構図を取った後、大まかに陰影を付けながら下絵を描いていった。

続いて、2 コマ目 40分ほど使って、水彩絵具の具を使った着彩練習を行った。これは、絵具で着彩する事について、過去の経験を振り返りながら自由に意見を挙げてもらった際、苦手意識を持つ学生が多いことが把握でき、その理由を尋ねてみると、「見たままの色にならず色が濁って汚い色になる」、「線描きまではどうにか出来ても、絵の具を使うと思うようにいかず描く意欲が無くなる」、「どういう風に色付けしていったらいいか分からない」といった意見が聞かれたからである。

着彩練習の前に、色の濁りの原因の一つとして道具の適当な扱いが十分身につけていないことが予想された為、パレットや筆洗の基本的な使い方について確認した。パレットに関しては、仕切りを混色と色を置く場と使い分け、絵具も色水による濁り防止のため、左から右に向かって明

るい色から色相順に置くよう指導を行った。筆洗についても、洗い場・すすぐ場・付け水と分けることを指導した。

その後、実際に絵具を用いて基本的な技法を4つ程取り入れた着彩練習を行った。(図2)

まず1つめが、水と単色を使った濃淡表現の練習である。留意点として、濃い色から塗り始め、余りの絵具に水を適量足して淡い色を着彩するよう手順を決め、水の量なども具体的に実演して示しながら制作に取り掛かった。

次の拭き取りと呼ばれる技法については、濃い色を修正したい時に活かせる方法として紹介した。はじめに、濃い目に溶いた絵具を枠内に塗り、乾燥後明るくしたい所に水気を与え、筆先でなぞり浮いた色水をティッシュで拭き取るよう伝え、色調が変化したかを確認させた。

更に3つめの技法として、にじみの練習を行った。この技法は、水分が乾かない内に仕上げるのがポイントであるため、色水を数色作っておくようにし、枠内に透明な水をひき、明るい色水から順ににじませていった。色を足していく時は、塗りつぶすというより、色の付いていない所や色の境界に点を置いていくと綺麗なにじみができることも伝えた。中には数色の水が溜まり、濁ってくるため、ティッシュで余分な色水を吸わせたり、全ての色を置いた後は手を加えないよう指導した。

最後に、筆使いの練習のため、筆致が良く見えるよう1色を水でよく溶いた絵具を使い、筆の穂先で色の点を描く練習を行った。丸い形の輪郭線付近から内に向かって筆を沿わせながら描いていき、筆の動きが十分感じられるか確かめながら制作を行った。

2コマ目後半から3コマ目にかけては、これまでの水彩画の基本的な練習や道具の扱いなどを踏まえて着彩を行った。

実践1の成果としては、これまで十分でなかった道具の扱いを確認できた事と、基本的な描画の技術を身につけられた事が挙げられる。特に、ねらいでもあった基本的な描画の技法について、学生の作品から検証してみると、作品1では雲の表現や建物の明暗表現に拭き取りの技法が使われているが、拭き取りのぼけた感じが曖昧な輪郭の雲に合っていて効果的であるし、建物も一部明るい所に拭き取りをいれることで明暗がしっかり出て立体感も出ている(図3)。

更に、作品2はタッチを生かして木々の幹や葉の表現をしており(図4)、作品3では、湿った砂を表現するのに筆跡が残らないようににじみを用いたり、水加減による濃淡の表現を使って、遠景にある水辺は絵具を濃くし、逆に近景になるにつれて徐々に淡い色に変化させて、微妙な濃淡で空間を表していたりすることが読み取れる。また、一部水の波紋を表す為に筆のタッチを描き加えていることも分かる(図5)。

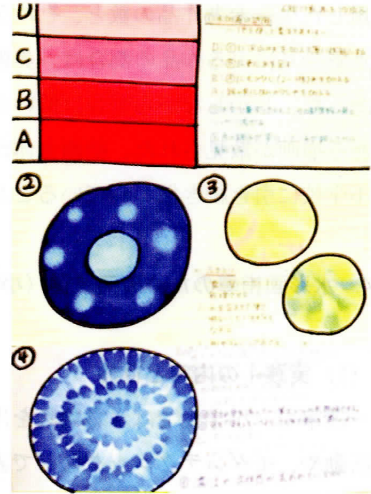


図2. 水彩絵の具による着彩練習

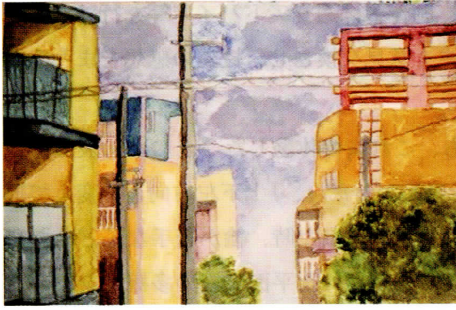


図3. 作品1 拭き取りを活かした表現

このように、表したいことに適した技法を選び作品の中に十分活かしていることが分かる。ここで挙げた技法は子どもの表現にも度々使われるもので、このような実践を通して実際に制作する経験は現場でも十分役立つと考える。

(3) 実践2の内容と目的

実践2は、実践1と同じ学生に対し、水彩絵の具の様々な技法について授業を行った。2コマを使い、12種類の技法を自由に組み合わせながら制作することを通して、多様な表し方を学び、表現の幅を広げるというねらいをもって実践した。

本実践で取り上げた技法は、教科書でも紹介されているバチック、スタンプング、吹き流し、ドリッピング、デカルコマニー、スパッタリングを始め、洗い出し、ビー玉転がし、絵の具以外を使った技法としてマーブリング、スクラッチ、フロッタージュ、コラーージュなどを用いた。

(4) 実際

1コマ目に、様々な表現技法を用いて制作した作品を数枚提示し、主題や絵の印象について聞いた。その後、実際にどんな道具を使い、どのような方法で描いたものか予想させた。次に、教員が全種類の技法を実演し、道具の扱いや手順などを説明し、一通り技法について学んだ後、本題材のねらいと課題について伝えた。作品作りについては、沢山の技法に触れられるよう、作品には3種類程の表現を組み合わせる事などを条件とした。1コマ目後半は、自由に手を動かしながら全ての技法を体験できるように、試す時間を設定した。この実験制作で、偶然できた形や模様の面白さをじっくり見て楽しんでもらい、その後紙の天地を変えて見る方向を変えたり、線を描き加えたり、形を切り抜いたりして、表したいことを発想できるようにした。

2コマ目は作品制作に移ったが、主題を決める際は風景や生き物などの具象でも音や季節、感情といった抽象的なものでも、形や色を効果的に配置した模様などをテーマとしても良いことを



図4. 作品2 筆のタッチを活かした表現



図5. 作品3 にじみと濃淡を活かした表現

伝え、学生の自由な発想を基に作品作りができるよう、制作中は適宜アドバイス等を行った。作品完成した後は、他学生の作品を鑑賞し、工夫点や良さを意見交換させ、授業の感想をまとめさせた。

制作後の学生の感想の中には、「同じ絵具を使っても、これまで体験したことのない表現ばかりで新鮮だった。」「思いがけない色や形が出てきて楽しかった。」「上下左右向きを変えて形を見ると絵具のしみが違う物にみえて不思議だった。」「現場に出た時、絵が苦手な子どもたちも遊びを楽しむ感覚で取り組めると思う。」など、水彩絵具を用いた平面表現の多様性を学ぶことができたことや、技法を取り入れる事で表現する楽しさを感じられたという意見があった。

また、学生の作品から、水彩絵具を使っても、絵筆で描いたり塗ったりしたものとは全く違った造形と発想が生まれており、技法を用いることでこれだけ幅のある表現ができることを改めて実感した。また、作品6～8は、水彩絵具の具によるスタンピング、スパッタリングといった同じ技法を取り入れた作品だが、それぞれの技法の活かし方は違い、創意工夫できていることが分かる(図6.7.8)。

さらに、これらの技法に作品9はデカルコマニー(図9)、作品10はドリッピングにスクラッチ(図10)、作品11は、吹き流しとコラージュ、スクラッチなどを加えた表現で(図11)、技法の組み合わせ方で思い思いの表現が出来ていることが分かった。



図6. スタンピングやスパッタリングドリッピングを併用



図7. スタンピングやスパッタリングマーブリングを併用

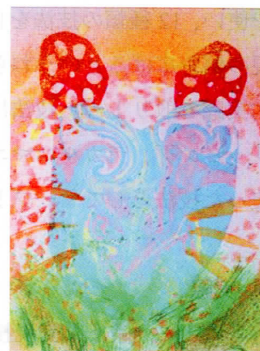


図8. スタンピングやスパッタリングを併用



図9. スタンピングやデカルコマニーを併用

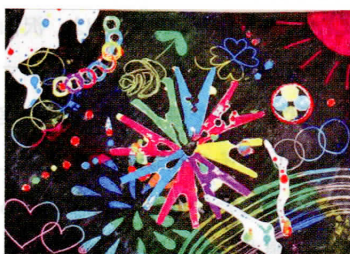


図10. スタンプやスクラッチドリッピングを併用

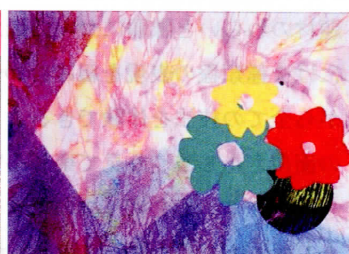


図11. スパッタリングや吹き流し、コラージュを併用

5. 水彩画指導のための実践例（中学生以上向け）

（1）実践の内容と目的

本章では透明水彩絵具を用いて、透明感あふれる透明水彩絵具ならではの色調をめざすものとする。そのために透明水彩絵具の代表的な技法である、ウェット・イン・ウェットを中心とした表現の習得と、用紙と用紙に置いた絵具との間のエッジの強弱による、色彩の強弱や画面の空間表現の表出を獲得することが主な目的である。

（2）実際

本節で扱う参考作品の対象学年は大学2年生～4年生と大学院修士課程1～2年生で、多くは美術専修生である。なお、本実践は10年以上にわたり該当の授業で実施しており、小学校教員専門科目を履修する非美術専修生にも同様の実践をおこなっている。美術専修生と非美術専修生を比較すると、デッサン力の有無の差はあるが、水彩絵具による表現力に関してはほとんど差がないことが作品から読み取れる。大学入学前から絵画実技を学んできた美術専修生であるが、水彩表現については経験が浅いと思われる。

具体的な実践の方法であるが、まず学生に与えられた静物モチーフを水彩絵具で表現してもらう（1回目）。鉛筆による下描きをしてから着彩という流れもあるが、ほぼ毎回、直に水彩絵具で着彩表現するよう指示している。これは鉛筆による下描きによる形態の正確性よりも、絵具の色調そのものによる表現を重視するためである。なお制作時間は15分程度とし、F6号画用紙の半分に描写する。

次に、別の画用紙にウェット・イン・ウェットによる表現の練習をおこなう（図12）。水で濡らした上に絵具を置いたり、下層の色が濡れているうちに別の色を重ねたりして、偶然の混色・グラデーションによる表現を体感する。また用紙と絵具との間のエッジを作ることによるシャープな形態の表出の獲得についても確認する。さらに、一度塗った色を取り除く技法である「ふき取り」についても実践する。塗布した絵具が乾燥前であればそのままティッシュ等をあ

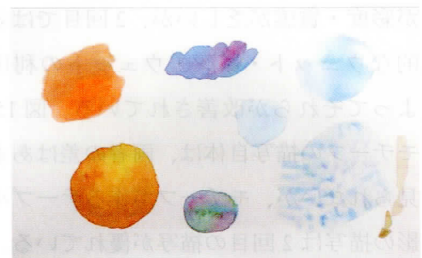


図12. ウェット・イン・ウェットによる練習

てて取り除き、乾燥後であれば取り除きたい箇所を水で濡らし、時間をおいて水が染み込んでから同じくティッシュ等で取り除くことができる。この技法は一度塗った色を消し去る役割のほか、塗布した色をふき取ることで淡い色となるため明度を高める操作も可能である。絵具の色の選択においては、絵具の黒色を使わずにグレー調の色を作り、それを水の多少によって明度変化をさせた色を塗布することで、混ぜる水の量と明度との関係の理解をめざす。絵具の黒色は原則として固有色としての黒色表現にのみ使用し、特にモチーフの影の部分には使わない、白色部は

用紙の白地を生かす、すなわち絵具を塗らないということも加えて指導する。

それらをふまえてひととおり練習した後、1回目として描いた作品を各々で検証する。すると1回目の作品の表現の特徴として、ほとんどの作品は少量の絵具や水を使って細めの筆のタッチの集積で表現したり、一度置いた絵具の上から何度も絵具を重ねて表現したりして仕上げていることがわかる。前者の技法の場合、透明水彩絵具がもつ透明感の欠如や、複数のタッチによる静物モチーフの質感表現の不足が見られる。後者の技法では、過度の重色（ウェット・オン・ドライ）による彩度の低さや透明感の欠如が読み取れる。

そこで2回目として再度、同様のモチーフを表現するが、今度は練習したウェット・イン・ウェットを中心とした技法をとり入れて描写していく。完成後、1回目の作品と比較することで、1回目の表現技法の問題点や2回目の表現のポイント等についての理解が得られ、透明水彩絵具の特徴を生かした描画技法を習得することができる。以上の点を図13～15の実際の学生作品で検証してみたい。図13、14は1回目が彩度・質感が乏しいが、2回目では効果的なウェット・イン・ウェットの利用によってそれらが改善されている。図15はモチーフの描写自体は、両者の差はあまり見られないが、モチーフが作るテーブルの影の描写は2回目の描写が優れている。特にモチーフ後方の、テーブルにうつるモチーフの影においては、1枚目はエッジが強すぎるために奥行き表現が弱いが、2枚目ではそのエッジが消失し、用紙の白色にとけ込む表現が成されているため、テーブルの奥行き表現を生み出している。

ウェット・イン・ウェットに慣れたら、さらに高度な表現・技法習得のための練習をすることも可能である。例えば図16では、絵具の黒色・白色を使用せずに黒色系～白色系のグラデーションを行なっている。その際、絵具の明度差は加える水の量の変化のみで表現する。この練習から混色する色の種類や配分差によって、微妙な色調のグレーを作り出せることを理解し、実際の作



図13. 透明水彩絵の具による学生A作品
左：1回目、右：2回目（各15分）



図14. 透明水彩絵の具による学生B作品
左：1回目、右：2回目（各15分）

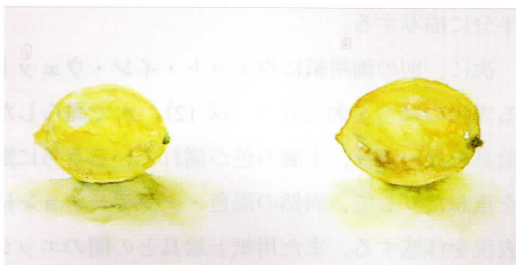


図15. 透明水彩絵の具による学生C作品
左：1回目、右：2回目（各15分）

品制作に活かすことができる。またスクラッチ等、使用頻度の高い他の技法や、水彩絵具以外の色材との併用による描画等も試みてもよい。図17の中央は、釘で葉脈の溝をつけたのちに着色することで、溝にたまる絵具を生みだして明度差を表現している。右は葉脈をアクリル絵具の白色で描いた後、水彩絵具で着色することで、アクリル絵具の箇所には水彩絵具があまり定着しておらず、結果としてマスキングによる表現とは違った画面を生みだしている。



図16. 黒・白以外の色の混色によるグラデーション
(明度差は水の量のみで調節)

以上のような練習・試作を経て、あらためて水彩絵具による作品制作をしてみると、ほとんどの学生に練習前の作品よりもレベルの向上を確認することができた。図18、19の学生Dによる作品を見ても、その変化を読み取ることができる。



図17. 左：スクラッチ（着色後に実施）、中央：スクラッチ（着色前に実施）、右：アクリル絵具との併用

図18の練習前の作品では、学生自身が持つ高いデッサン力・色彩表現力によっ

て淡彩調のきれいな色彩が表現されている反面、モチーフの立体感・重厚感は乏しく、やや軽い印象を受ける。一方、練習後の図19を見ると、明度差・彩度差が大きくなり、さらにモチーフの質感表現も向上しており、作品から深みを感じとれるものとなっている。



図18. 学生Dによる作品（練習前）



図19. 学生Dによる作品（練習後）

本章では、中学生以上の生徒に対する水彩画の指導法に必要な技法習得のための描画の方法・ポイントについて論述してきた。ウェット・イン・ウェットを中心とした透明水彩絵具を用いた技法は、小学校での水彩技法とは異なり、絵具の透明度を最大限に利用したものであり、学生はそれらの技法の習得によって水彩表現の新たな魅力の発見に気づき、教職に就いた際には意欲的

に水彩画を授業に導入することの一助となるはずである。

6. おわりに

扱いやすく他の色材よりも安価な水彩絵具であるが、その種類はもとより、描画技法も様々なものが存在している。しかしそれらは決して難解なものではなく、絵具の性質や特徴を理解し、最低限の練習を経ることで習得できるものである。それは水彩絵具が持つ、原則として絵具と水のみで表現すること、絵具乾燥後も再溶解すること等の単純・安易・安全な性質による所為であるといえよう。教員をめざす学生自身がこの水彩表現の魅力に興味を持つことで、各発達段階に適応した水彩画の指導を意欲的に取り組むことができるであろう。今後もさらに水彩画の魅力や表現の可能性について探求し、教員養成系の学生教育に寄与していきたい。

注および引用文献

- (1) 森田恒之、『画材の博物誌』、中央公論美術出版、1994年、pp.60-61、参照
- (2) 森田恒之監修、『絵画表現のしくみ』、「II画材・水彩絵具」横山勝彦著、榊美術出版社、2000年、p.65、参照
- (3) 日本造形教育研究会、『文部科学省検定済教科書小学校図画工作科用』、開隆堂出版、2016年、1.2上・下 pp.2-45、3.4上・下 pp.2-45、5.6上・下 pp.2-47、参照
- (4) 日本児童美術研究会、『文部科学省検定済教科書小学校図画工作科用』、日本文教出版、2016年、1.2上・下 pp.2-57、3.4上・下 pp.2-57、5.6上・下 pp.2-57、参照
- (5) 藤江充、辻政博、『小学校新学習指導要領ポイントと授業づくり図画工作』、東洋館出版社、2008年、pp.196-201、参照
- (6) 『美術1』『美術2.3上』『美術2.3下』、日本文教出版株式会社、2011年、参照